受・発注者の学び方への思い

利根川水系砂防事務所　品質確保課　浅見　知子
（現　高崎河川国道事務所　工務第一課）

１．はじめに

2017 年に受験した経験者採用試験を通して、学びの必要性を感じた。そして、それは、受・発注者にとって必要な学びとは何かを考えるきっかけとなった。発注者として、品質のよい仕事を進めていくためには、受注者への技術力の向上を目的とした学びの場の提供が必要である。学びの場の提供は、発注者にとっても理解を深める良い機会であると思う。そして、学びを CPD 等で、しっかりと評価することができれば、学ぶ意欲につながり、結果としてよい仕事へとつながっていく。またよい仕事には、受・発注者間のコミュニケーションも重要であり、コミュニケーション能力の向上につながる学びも必要である。しかし、働き方改革によって、今まで以上に限られた時間の中での学びは、学び方についても改革が必要である。このような背景から、これからの学び方への提案と学びに対する思いを伝えたい。

２．経験者採用試験を体験して

当時、高崎河川国道事務所の期間業務職員として働いており、現場に同行する機会があった。久しぶりの現場の空気感が新鮮で、また土木技師として働いてみたいと漠然と感じていた。そんなとき、国土交通省の経験者採用試験を知り、県の土木技師として働いていた経験を活かしたいと思うようになった。また、２人の子供達が受験生だったこともあり、自分も何か受験し学んでみたいと思い、そこから、「学び直すこと」がはじまった。採用試験を体験して、学ぶことは、新しい自分を発見することでもあると感じた。

図１　経験者採用試験案内
（国家公務員試験採用 NAVI より）

３．学びの評価―CPD と学びについてー

CPD とは、Continuing　Professional　Development の略であり、「継続教育」を意味する。関東地方整備局における総合評価方式では、品質確保を図るため、配置技術者の技術力の確保、向上のため、継続教育（CPD）の取り組み状況を評価している。利根川水系砂防事務所では、年に２回安全対策協議会を開催している。平成３０年度第１回までは、建設系 CPD のみに、プログラム認定を依頼し、受講証明を発行していた。そのため、業務受注者にとっては、参加しても、CPD としてあまり活用されていないという実情があった。また、年１回開催している安全施工管理技術発表

会では、平成２９年度までは、発表会への出席に対してはCPDポイントとして評価していたが、論文の提出や発表に対しては、CPDとして評価していなかった。この２つの課題を改善するため、平成３０年度（安全対策協議会においては、第２回から）では、測量系CPDも追加し、論文発表者についてもCPDポイントを付与することを試みた。

表１　安全対策協議会におけるプログラム認定依頼協会

	H29第１回	H29第２回	H30第１回	H30第２回
建設系CPD（出席者）	○	○	○	○
測量系CPD（出席者）	－	－	－	○

表２　砂防関係工事安全施工技術発表会におけるプログラム及び論文認定依頼協会

		H29	H30
建設系CPD	出席者	○	○
	論文提出者	－	○
	論文発表者	－	○
測量系CPD	出席者	－	○
	論文提出者	－	○
	論文発表者	－	○

その結果、受注者の出席者数は増加し、特に、業務受注者の参加者の伸びが大きかった。しかし、論文提出者数については、大きな変化は見られなかった。このことから、CPDという形で、参加者の学びを評価することによって、参加者が増加する傾向が見られた。しかし、論文提出というような時間のかかるものに関しては、すぐに提出者の増加には結びつかなかった。

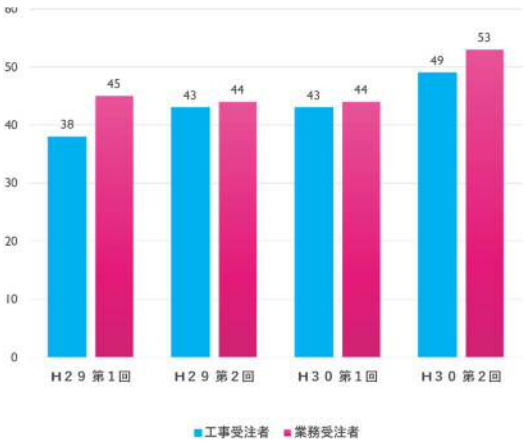

図２　安全対策協議会における工事及び業務の受注者の参加人数

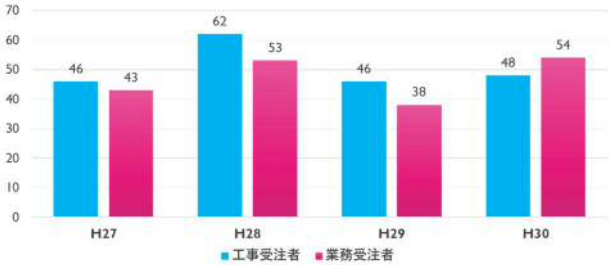

図３　砂防関係工事安全施工管理技術発表会における工事及び業務の受注者の参加人数

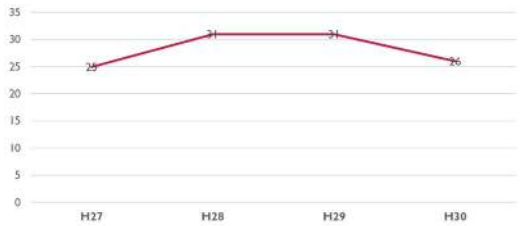

図４　砂防関係工事安全施工管理技術発表会の論文提出者数

４．コミュニケーション能力の向上にもつながる学び
―利根川水系砂防事務所現場研修会の報告―

平成３０年１０月に、第１回現場研修会を開催した。工事契約後の設計変更や工期延期、現場条件等による受注者への負担軽減を目的としており、施工現場で、各担当者より工事発注時の課題や反省点、対応等について意見を出し合いながら意見交換を進めていく。

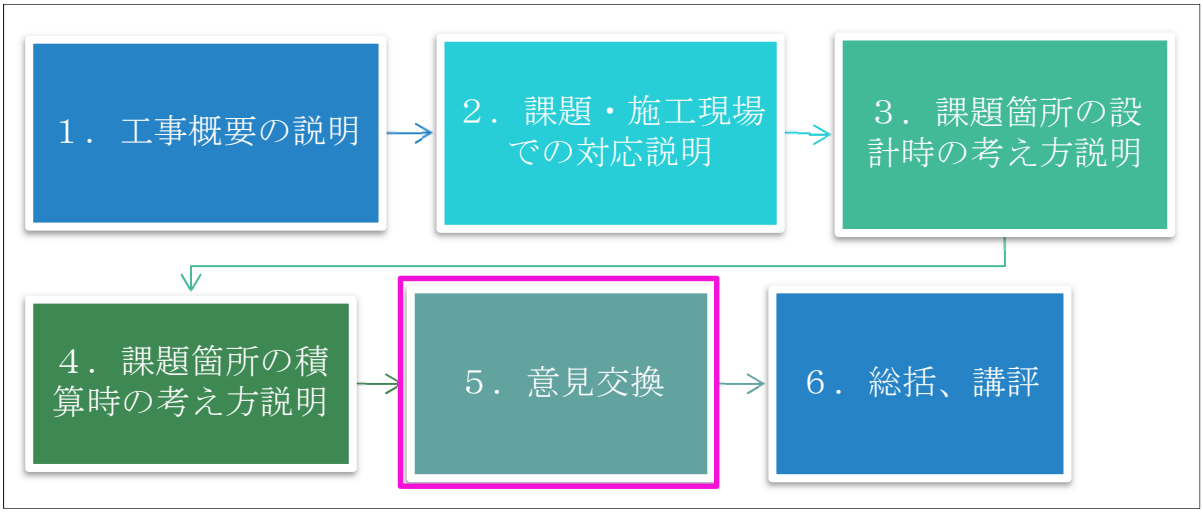

図５　現場説明会の流れ

写真１　現場説明

写真２　現場見学

現場研修会は、実際の現場で、問題個所を見ながら、意見を出し合うため、イメージが湧きやすい。また、様々なアイデアが出やすく解決策を見つける手掛かりとなりやすい。そして、受・発注者間のコミュニケーション能力の向上に役立つ。参加者からは、「今回のような現場での意見交換会は重要」「今後の設計にフィードバックすることが大切」など積極的に意見があがった。このような受・発注者間の意見交換会は、受注者への学びの場の提供だけでなく、発注者にとっても実践的な学びの場となり、意識の向上も図れる。今後も継続していくことが大切だと思う。

５．これからの学び方について

学びには、INPUT 型の学びと OUTPUT 型の学びがある。INPUT 型とは、情報を取り込むことであり、例えば講演会等への参加、e ラーニングでの学習などがある。OUTPUT 型とは、取り込んだ情報を外に向けて発信することであり、例えば、論文の発表や、講演を行うことである。OUTPUT

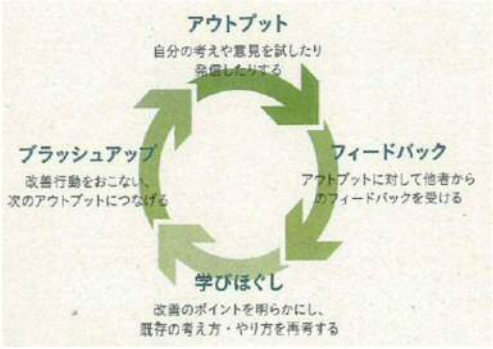

図６　アウトプット型学びの循環モデル
（土木学会誌より）

型の学びは、INPUT 型の学びで得られた知識を活用し、他者に向けて発信することから、より深い学びとなる。また、他者からのフィードバックをもらい磨きをかけていくことでさらに深い学びとなる。これからの学びは、OUTPUT 型の学びが中心になり、様々な分野で OUTPUT 型の学びが活用されている。受注者への学びの場の提供は、発注者にとって OUTPUT 型の学びになることが多い。発注者としては、よりよい OUTPUT ができるように、自ら学ぶこと、学び直すことが必要である。そのためには、研修へ参加のほか、技術士などの資格へのチャレンジ、技術エキスパートの研究会への参加などが有効だと思う。

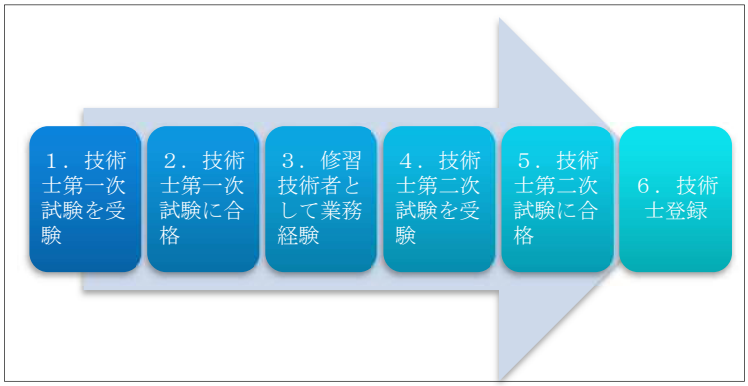

図７資格取得（技術士）

写真３、写真４　技術エキスパート研究部会（砂防部会）

また、日常の業務の中で、まとまった学びの時間を確保するのは難しいため、隙間時間で活用できる土木のための e ラーニングがあると学び直しが身近になると思う。JMOOC のような公開オンライン講座を使った、学び直しも有効であると思う。

６．まとめ

安全対策協議会等に活用する CPD の種類を増やすことにより、受注者の参加者数は増加した。今後は、コンサル系の CPD も追加するなど、より多くの参加者が意欲的に参加できるように工夫していきたい。またこれからは、INPUT 型の学びだけでなく、OUTPUT 型の学びに対しても、評価することが必要である。

また、現場研修会など、実際の現場で行う意見交換会は、受・発注者間のコミュニケーションの向上につながり、問題解決への意欲につながる。これからの課題として、継続すること、研修会現場のその後も追って報告するなど、今後につなげる工夫が必要であると感じた。

これからの学びは、働き方改革によって、学びにも効率が求められる。OUTPUT 型の学びにより、INPUT した知識を、活用できる知識にすることが必要である。また、受・発注者の学びは、継続していくことが大切であり、自ら学び続けることによって、仕事の効率も上がり、結果として働き方改革につながるはずである。

参考文献：1)土木学会：土木学会誌　Vol.104 NO. 4　April 2019
2)JMOOC:JMOOC HP　https://www.jmooc.jp/